わがまち歴史散歩

市史編纂だより㉒

橋～呉服橋①

西国札所への橋

猪名川に架かる呉服橋。大阪府と兵庫県とをつなぐこの橋には、毎日多くの車や人が行き交います。

江戸時代中ごろからこの場所には、たびたび仮橋が架けられてきました。それが本格的な大橋に架け替えられたのは、文化12年（１８１５）のことでした。橋のたもとの池田西ノ口町（現西本町付近）が世話人となり、人々から寄付を募って架橋したのです。当時は、西国三十三所の二十三番札所勝尾寺（箕面市）から二十四番札所中山寺（宝塚市）への順路の橋であることから、「順礼橋」と呼ばれていました。

池田側から見た呉服橋（箕面市総務課文書担当蔵）

それが現在の呉服橋と改称されたのは、明治に入ってからのことです。明治11年（１８７８）、旧家の日記に「呉服橋」の名が初めて登場します。改称は池田の古名「呉服の里」にちなんだものだったようです。ただ、日記ではかなり後まで「順礼橋」とも記載されています。「順礼橋」の名は、長く人々に親しまれていたといえるでしょう。

寄付金から税金へ

ところで、洪水で流されるたびに寄付を募って再興されてきた呉服橋ですが、やがて、税金によって維持されるようになりました。明治15年（１８８２）、地方税１４６０円を投じて架け替えられます。同17年度の池田村の財政規模が２０００円余りですから、橋の維持がいかに大変であったかがうかがえます。ちなみに、このときの竣工式の渡り初めは、豊島能勢郡役所や池田村の役人らに学校の生徒たちも加わる盛大なものでした。

しかし、木橋だったためでしょうか、その後も何度か流され、特に同29年（１８９６）の大洪水の被害は甚大で、「流失して影を止めず」と記されています。

絵葉書になった呉服橋

今回紹介する写真は、明治の終わりから大正初めごろの呉服橋の絵葉書です。上の写真には、そぞろ歩く着物姿の人々、端正に組まれた木製の欄干、モダンな外灯、はるか遠くに宝塚の山々も望めます。また、右の写真には、木製の橋脚や、対岸に「呉服座」と並ぶ規模を誇った芝居小屋「川西座」などが見えます。

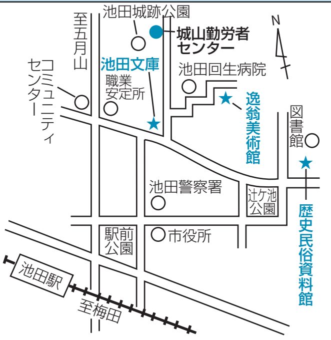
どちらも当時の呉服橋の姿を知る貴重なものです。このような木橋の時代は、その後も、しばらく続きました。

川上から見た呉服橋（歴史民俗資料館蔵）

問い合わせ＝社会教育課市史編纂（城山町３―45、城山勤労者センター内、☎７５３・２９０４）

※火曜・祝休日は休館。

みゅうじあむ・がいど

館　名	展示名（期間）／みどころほか	開館時間／休館日／料金	地　図
市立歴史民俗資料館 ☎751・3019	●特別展「池田氏と牡丹花肖柏」　～12/3㈰ ☆記念講演会…「牡丹花肖柏と連歌の世界」 帝塚山学院大学名誉教授・鶴崎裕雄さん （11／19㈰14：00～、池田郷土史学会協賛）	●10:00～18:00 ●月・火曜日・祝日（11/３は開館） ●無料	
㈶逸翁美術館 ☎751・3865	●秋季展「京の風雅―円山四条派と京焼―」　～12/10㈰ ☆講演会…「応挙から呉春へ」 美術史家・橋本綾子さん （11／25㈯14：00～、13：00から座席券配布）	●10:00～17:00（入館は16:30まで） ●月曜日（祝日の場合は翌日） ●一般700円、学生500円、中学生以下200円	
㈶阪急学園池田文庫 ☎751・3185	●宝塚歌劇と民俗芸能　～12/3㈰ ☆講演会…宝塚の民俗芸能研究の歴史的意義 ―「国民文化」と「地域文化」のはざまで― （11/18㈯13:30、聴講500円）	●9:30～17:00（入館は16:30まで） ●月曜日、11/1㈬・23㈷ ●200円（図書館は無料）	

歴史民俗資料館特別展

池田氏と牡丹花肖柏

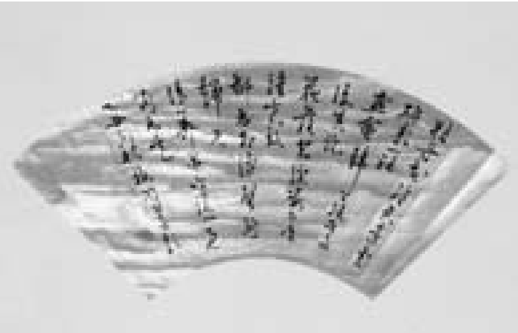
最終回

前回、池田氏と連歌の関係について述べましたが、今回は、池田文化の礎を築いた牡丹花肖柏の事績が、どのように引き継がれてきたかを見てみたいと思います。

近世における池田文化の発展

池田は、近世になると在郷町として発展を遂げました。その発展を支えたのは、良質の米と水を用いて生産された池田酒や、池田炭の名で呼ばれた木炭などの物資の集散です。

池田の経済的繁栄に引き寄せられるように多くの文人たちが池田を訪れました。肖柏が築いた文化の礎のもと、来訪する文人たちの影響を受けて、近世中期以降、池田で独自の文化が醸成されました。



牡丹花肖柏遺愛碑五律（歴史民俗資料館蔵）

牡丹花隠君遺愛碑の建碑

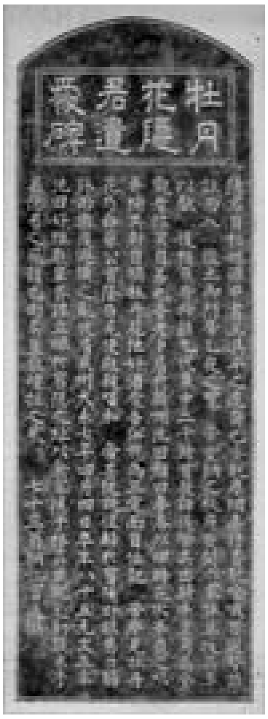
肖柏に対する顕彰は、池田文化を発展させた儒学者・田中桐江による「牡丹花隠君遺愛碑」の撰文から始まります。

桐江は、寛文8年（１６６８）出羽庄内に生まれ、儒学をもって柳沢吉保に仕えた人物で、荻生徂徠とのあつい親交が知られています。しかし、正徳3年（１７１３）に吉保の奸臣を斬ったことにより江戸を出奔し、享保9年（１７２４）から池田で隠棲生活を送ることになりました。桐江のもとには多くの好学の士が集い、桐江を盟主とする漢詩文の結社「呉江社」を設立するまでになりました。

遺愛碑の建立は、元文5年（１７４０）、有志による肖柏顕彰の運動を受けて、桐江が僧・元政著の伝記集『扶桑隠逸伝』の肖柏伝を参照して撰文しました。しかし、この時は建碑までには至らず、60年の年月を経て書家・荒木梅閭によって達成されました。

梅閭（１７４８〜１８１７）は、池田の酒造家荒木家の出身です。書家として多くの作品を残しており、兄で漢詩人の荒木李谿（１７３６〜１８０７）とともに最盛期の池田文化をけん引した人物です。

梅閭は、同志と語らって、桐江が成し得なかった肖柏遺愛碑の建立を計画し、文化元年（１８０４）、桐江が遺した撰文を自らの筆で清書し、現在、肖柏ゆかりの大広寺にたたずむ碑を完成させました。その時の達成感を漢詩にあらわしたものが「牡丹花肖柏遺愛碑五律」です。



牡丹花隠君遺愛碑拓本（歴史民俗資料館蔵）

山川正宣と肖柏三百年忌

文政9年（１８２６）4月4日、肖柏の三百年忌が行われました。中心となったのが、国学者・山川正宣（１７９０〜１８６３）です。参加者は一人三首ずつ和歌を献詠し、それを巻子に仕立て「牡丹花肖柏三百周忌懐旧和歌」と名付けて大広寺に奉納しました。この巻子は池田市指定文化財として現在も伝えられています。

正宣は、当時池田で最大の酒造家大和屋の当主で、近世末期の文人の一人として知られています。正宣は、賀茂季鷹に師事して和歌、国学を修め、大和薬師寺にある仏足石歌碑に関する論考『仏足石和歌集解』や神武天皇から平城天皇にいたる御陵に関する『山陵考略』などを著しています。

近世末期、池田文化は衰退の途をたどりはじめており、正宣は肖柏から続く池田文化の伝統を守りたいという強い思いから、肖柏の三百年忌を大々的に行ったようです。懐旧和歌の序文に、肖柏の暮らした昔を忘れずにいてほしい、もし奉納した懐旧和歌が百年後まで残っていたならば、自分たちの思いを含めて、肖柏の顕彰を行ってほしいとの願いを述べています。

正宣の望みどおり、近代に入っても肖柏への顕彰が継続して行われました。大正12年（１９２３）に出版された吉田鋭雄、稲束猛の共著『池田人物誌』では、巻頭に池田文化の礎を築いた人物として肖柏が取り上げられています。また、同15年（１９２６）の肖柏の四百年忌に当たっては、大広寺を中心に大々的な顕彰会が計画されました。このときには、記念絵はがきの発行や歌会などが開催されています。このように、池田文化の発展に寄与して多くの文人たちは、この地に隠棲した肖柏にあつい崇敬の念を持ち続けていたのです。

問い合わせ＝歴史民俗資料館（☎７５１・３０１９）